戦前の東アジアにおけるテュルク・タタール移民の歴史的変遷に関する覚書

オスマノヴァ・ラリサ

はじめに
第１期：テュルク・タタールのアジアへの移住のはじまり
第２期：ロシアの圧力を逃れて
第３期：民族主義の台頭
第４期：弱められた民族主義
まとめと課題

は　じ　め　に

（1）本稿の背景と目的

本稿は、1898年から1950年戦後直後にかけて、ロシアから中国、日本、朝鮮に移動したテュルク語系のタタール語などの言語を話す「タタール移民」に関して、彼らのコミュニティをめぐる政治的・社会的状況の変化に注目しながら、５つの時期にわけてその歴史社会学的な特徴づけを行うことを目的とする。

本稿の論点は、次のようなものである。(1) 20世紀前半のアジアにおける「タタール移民」の歴史を跡づける、(2) つぎに、「タタール移民」移住の歴史的推移を時期ごとに区別してその意義を明らかにする、(3) 各時期の「タタール移民」の数、男女比率、職業、所在などを可能な限り明らかにする、(4) コミュニティのタイプとアイデンティティの変化を分析し、最後に「タタール移民」移住の定義を確定する。

さて、ロシア帝国からアジアへの移民に関する歴史研究は、ロシアのみならず、多くの国々において、注目されている学問的トピックである。例えば、ロシアでの代表的な研究である、ヒサムトヂノフの『太平洋地域と南アメリカへのロシアの移住』はハワイ大学のハミルトン図書館に保存されるロシア人移民資料から移民の個人データを大量に収集するという高い成果をあげ、レビャキナの『中国へのロシアの移住――適応の問題（1920－40年代）』も同じ資料を用いて、移民コミュニティのタイプや人口の変化など社会学的側面での成果をあげた[1]。確かに極東におけるロシア帝国からの移民の研究は進みつつあるが[2]、「タタール移民」のコミュニティへの関心は依然として高くはない[3]。

そもそも、このアジアに向かったテュルク語系の言語を話す移住者に対する社会学的な定義さえ、「テュルク・タタール」、「タタール・バシキル」、「ムスリム・ディアスポラ」などいくつかあり、いまなお確定されてない[4]。確かに、1930年までロシアに住んでいた大部分のテュルク人の民族アイデンティティは、共通言語であるタタール語を使用しながらも、民族による連帯意識よりは、宗教的な結びつきが優位を占めていた。それは、ロシアのテュルク系タタール人コミュニティというよりは、「ムスリム・コミュニティ」ともいうべき組織が設立されていたことがその根拠となる。確かに1904年ハルビンに創立した組織の正式名称はロシア語で Мусульманское Духовное Общество（ムスリム教協会）と名づけられていた[5]。しかし、筆者は次の歴史的事実を重視したい。すなわち、1917年７月、全ロシア・ムスリム会議で、イデル・ウラル共和国の議会（ミッリ・メジュレス）の成立が宣言された。同議会は、同年11月ウファで「イデル・ウラル地方に住んでいる人々を“テュルク・タタール”と称する」との決定を下した。翌1918年４月でイデル・ウラル共和国[6]政府（ミッリ・イダレ）が解散したのち、移住を迫られたタタール人は「テュルク・タタール」と自称するようになった[7]。さらに、1923年のトルコ革命によってトルコ共和国が成立すると、テュルク・タタール移民は民族主義的な影響を受けた。なぜなら、タタール移民ユスフ・アクチュラは、日露戦争における日本の活躍に刺激され、1904年テュルク主義を標榜する「三つの政体」という論文を書き、1923年にはトルコ共和国の大統領補佐官に就任した[8]。このアクチュラの活動を通じて、テュルク・タタール移民はトルコ共和国が姉妹国であると認識するようになり、自らも「テュルク・タタール・イデル・ウラル」の国を作ることを民族的な課題として抱くようになったのである。

この歴史的な経緯の重要な点としては、当時「テュルク・タタール」という名称は、宗教的にはロシアのムスリムというアイデンティティを持ちながらも、民族的にはカザン・タタール人だけに属するという意味ではなく[9]、広くテュルク系に属する民族全体を意味する概念だと考えられようが、こうした民族的な概念はいたって曖昧である。ただ移民コミュニティを統合する要因の一つがタタール語であったにすぎなかった[10]。実際、次項で説明する本稿の基礎資料としてあげた『ミッリ・バイラク』、『ヤナ・ミッリ・ユル』はすべてタタール語で発行されている。以上の理由により、本稿では、いわばイデル・ウラルという生活圏を共通にしたテュルク系の複数の民族のうち、アジアに向かったタタール語を用いる移住者に対して、「テュルク・タタール」という呼称を用いておくこととする。

(2) 本稿の基礎資料

こうした戦前のテュルク・タタールの歴史を復元するための素材として、当時のタタール語メディアに注目する必要がある。周知の通り、冷戦後、ロシア、中国、台湾、韓国などアジアの様々な地域で資料が公開され、そのうちタタールスタン共和国とハバロフスク図書館に提出されたソ連の公安委員会の資料はとくに注目に値する。さらに、島根県立大学メディセンターに収蔵されている「服部四郎ウラル・アルタイ文庫」には、「タタール

人移民の古典書」[11] としての新聞『ミッリ・バイラク（*Milli Bairak*: 民族の国旗）』（1935年～1945年、奉天で出版）があることを筆者自ら確認した。このほか、雑誌『エラク・シャルク（*Eraq Shark*: 極東）』（1920年～24年、ハルビンで出版）や、東京で発行された雑誌『ヤナ・ヤポン・モフビリ（*Yana Yapon Mohbiri*: 新日本情報）』（1933年～1938年）、さらに筆者がベルリンで調査した『ヤナ・ミッリ・ユル（*Yana Milli Yöl*: 新しい民族の道）』（1929年～1939年）などがある。これらのメディアには、アジアに向かったテュルク・タタール移民の生活に関する記事が多く有益である。特に『ミッリ・バイラク』は、当時、極東テュルク・タタール移民の「生きている鏡」と名付けられ[12]、1940年代には「タタール移民の事典」と呼ばれた[13]。これらタタール語メディアの本格的な分析は別稿に委ねるが、以下、本稿では適宜それらの記事から得られる情報を盛り込んでいきたい。

（3）テュルク・タタール移民史の時期区分

これまでの研究の過程で、テュルク・タタール移民の歴史を以下の五つの時期に区分して説明することが適切であろうと考えている[14]。

第１期　1898年－1917年：テュルク・タタールのアジアへの移住のはじまり

第２期　1917年－1933年：ロシアの圧力を逃れて

第３期　1933年－1939年：民族主義の台頭

第４期　1939年－1945年８月：弱められた民族主義

第５期　1945年９月－1960年代以降：新天地を求めて

彼らのアイデンティティを各時期によって明確に特徴づけることは可能と思われる。むろんテュルク・タタール移民のアイデンティティは、宗教的にはロシア・ムスリムであり、民族的にはイデル・ウラル・タタール人としての要素をもつという複雑な構成であり、特定のアイデンティティの特徴で論じることには慎重でなければならないだろう。しかし、以下具体的に分析するように、テュルク・タタールのコミュニティを論じる場合には、こうした時期区分にもとづいたコミュニティの変化を強調することで、彼らの社会的位置づけ、歴史的意義を考察することが可能となる。

こうした試みは、筆者による独断ではない。例えば、エセンベルやドゥンダルなどトルコ人研究者たちは、日本とトルコとの関係や日本イスラム関係史を研究する過程で、日本の歴史（明治、大正、昭和）とトルコの歴史（オスマン帝国、1923年から共和国）の時代区分を照合させ、テュルク・タタール・ディアスポラの歴史を三つの時期に区別している[15]。しかし、こうした時代区分による考察はあまりにも概括的にすぎ、テュルク・タタール民族のコミュニティと民族アイデンティティを研究対象とするならば、やはり移民コミュニティそのものの変化に基づいて区別することが適切であると考える。

なお、戦後から現在までを範囲とする最後の第５期では、グローバルな政治経済の変化により、移民の活動もその範囲もより多様になる。東アジアのテュルク・タタール・ディアスポラがより国際的に活動の範囲を広げるばかりでなく、近年ではインターネットの普

及によりヴァーチャルな空間でのコミュニティを形成する。それゆえ、戦後のテュルク・タタール移民をめぐる問題は、本稿のように歴史社会学的な方法によるだけでなく、国際政治学や情報社会学的な研究手法を用いる必要があり、稿を改めて論じたいと思う。

第１期：テュルク・タタールのアジアへの移住のはじまり

テュルク・タタールがアジアに移住する契機にあたる時期は、1898年中東鉄道設立の決定から1917年のロシア革命勃発までで、これを第１期と設定したい。この時期、満洲へ来た最初のテュルク・タタールの開拓者はシェイフッラ・バイチュラであった[16]。テュルク・タタール移民、とくにペンザやカザンからの移民は、1904年にハルビンでムスリム・コミュニティを設立した[17]。ヒサムトヂノフの研究によれば、ビクバエフがこのコミュニティの創設者だったことが確認される[18]。

こうしたムスリム・コミュニティは、19世紀末から20世紀初頭にテュルク・タタール移民の中産階級の中に出現したが、コミュニティの結合力として民族的な結合よりも、宗教的な紐帯が優位を占めていた[19]。このことから、テュルク・タタール移民のアイデンティティはムスリム思想とイスラムのアイデンティティに結び付けられよう。それゆえ、この20世紀初期のロシアやハルビンのテュルク・タタール移民コミュニティも、「ロシアのムスリム」というアイデンティティで説明できると考える[20]。

第１期は、ロシアにおけるアジア系民族がロシア帝国の植民地主義に対して民族運動を勃発させたことを特徴とする[21]。この民族運動を促す外的契機となったのは、1905年のロシアに革命の刺激を与えた日露戦争勃発とロシアの敗北である[22]。1905年以前、民族語の新聞などを出版することはロシア帝国政府が許さなかった。しかし、1905年には四つのタタール語新聞が刊行され、次の1906年に更に16のタタール語新聞が刊行された[23]。

一方、テュルク・タタール移民がロシア帝国の民族政策を改革するために東洋から来る援助[24] に希望を持ち得たことは、その内的契機となったと考えられる。実際、その時、世界のムスリムと同様、テュルク・タタール移民も日本に対して親近感を抱いた[25]。実際、1904から1905年まで、つまり日露戦争中には、大阪郊外の泉大津市にあるロシア兵士の捕虜収容所では、イスラム聖職者（ムッラ）がいたと、イブラヒムの日記に記されている[26]。そこには、この収容所とモスクに関する書簡が、日本の天皇からロシア皇帝へ送られたと言及されているのである[27]。日本人に対する親近感をもったロシア帝国にいたトルコ人グループ[28] は、日本に向かい、日本をアジア人の擁護者とするべく活動した。例えば、ラシト・イブラヒム[29] というテュルク・タタール移民ムスリムが1902、1903－04[30]、1909年にカザンから日本に来た[31]。彼は、日本とトルコ、日本とイスラム、日本とタタールに関するホスト役を見事にこなしたことが分かる。1909年２月から７月にかけて彼の来日訪問はもっとも効果的だった。イブラヒムは反ロシア・反イギリスの立場である「アジア・イスラム同盟」設立の可能性を調査する目的で来日し、首相や外務大臣の経験者たち、例えば伊藤

博文（首相在任1885－88、1892－96、1898、1900－01）、早稲田大学の創立者大隈重信（外務大臣在任1888－89、1896－98、首相在任1898）、土方久元宮内大臣、黒竜会の代表者などと会った[32]。というのも、イブラヒムは、ロシアの圧力に対して援助してくれる可能性のある国を探していたためである。日露戦争における日本の勝利で、ロシア、イギリスに対して反植民地主義的な亜細亜同盟を作る可能性が起こったため、彼が援助国として想定したのはオスマン帝国、ドイツ、日本だった。イブラヒムの考えによれば、亜細亜同盟などの組織を結成するためには、日本がイスラム教を国家宗教とすることが必要だった[33]。

日露戦争の勃発から、日本は、テュルク・タタール移民に対して関心を持ち始めた。戦争中には、日本軍、とくに情報機関の関係者は、タタール民族主義を利用できると考えた。その中心人物は、大原武慶と山岡光太郎（後に日本人ムスリムのハッジ第一号[34]）だった[35]。イブラヒムは、1908年に大原に会い、日本でのモスク建設を提案した[36]。一方、大原武慶は1909年６月７日「亜細亜義会」を設立し、山岡と共にイスラム教に改宗した[37]。筆者は、彼らが日本におけるアジア主義的な思想とイスラムの考えを統一する最初の勢力だったと考える[38]（1932年に満洲国が成立した時、ようやくその統一が実現した[39]）。

イブラヒムは、1933年から日本に移住し、東京モスクのイマームとしてムスリム・コミュニティの生活を研究し、イスラム教を宣伝して、ヨーロッパとアジアを回った[40]。彼の目的は日本人をイスラム教に改宗させることにあった。その空想的な目標は実現されなかったが、彼の活動によって、日本ではイスラム文化を認める世論が喚起された[41]。こうして、その後来日したロシアからのムスリム移民（その大部分はタタール人やバシキル人であった）が、日本人に容認されることになった[42]。

その後、ロシアから日本に来たムスリムたちの活動はめざましかった。1927年東京に民族学校を設立し、1935年神戸に日本で最初のモスクを建設し、さらに1937年に名古屋、1938年には東京でもモスクを建設した（名古屋以外のモスクは修築されているにせよ現存する）。1944年以前、東京のムスリム・コミュニティのイマームたちのなかには、ラシト・イブラヒム（彼は東京の多磨墓地に埋葬された）を含むムスリムがいた[43]。彼は、テュルク・タタール移民の移住の第一期において、日本人にイスラム教とテュルク・タタール移民の存在を示す役割を果たした。

ただ、ロシア革命までの第一期において、アジアを訪れたテュルク・タタール移民は決して多くなかった。彼らのほとんどが男性の商売人で[44]、ロシアの影響下にあった満洲のハルビンのような都市にだけ居住していた[45]。この時期の移住は、ロシア人以外の民族に対するロシア帝国の否定的な政策が原因となって起こったといえる。ハルビンのイマームであるイヤツラ・セリフメトの下にあったモスクやコミュニティ[46]も、ロシアから来たムスリムの一分派と考えられ、特別の民族的アイデンティティがなかったと思われる。当時のテュルク・タタールのコミュニティは、イマームというイスラム指導者によって運営されたムスリム・コミュニティ（アラビア語で「マハッリャ」という）であったと考えられ

る。「マハッリャ」の中心にはモスクがあり、宗教的な自治性を持つムスリム・コミュニティとして、行政上の町、村などに重なる組織だった[47]。同時に、テュルク・タタール移民は、将来の協力と支援のために個人関係に基づいた友好的な「イスラム・サークル」を設立したのである[48]。

第２期：ロシアの圧力を逃れて

つづく第２期は、1917年ロシア革命から1933年末までに設定したい。ロシア革命は、アジアで将来の不安な運命を持っていた人たち、例えばロシア帝国領内のエスニック・グループの多くをディアスポラへと変化させた。同時に、彼らからロシア人としてのアイデンティティを失わせると共に、あらたなトランスナショナル・アイデンティティを形成させることになった。テュルク・タタールもこの新しい時代にあって、1923年の関東大震災後、ハルビンのムスリム・コミュニティを、日本、そして朝鮮にも設立しようと試みた[49]。1927年、ハルビンのイマームだったイヤツラ・セリフメトが亡くなると、東京のムスリム・コミュニティのイマームだったクルバンガリ[50]が、アジアにおけるテュルク・タタールのリーダーになった。その結果、コミュニティの活動拠点は、ハルビンから東京に移された[51]。当時のアジアにおけるテュルク・タタール移民の正確な数は不明であるが、「日本にいるテュルク・タタール移民は約２千、満洲と中国には約７千人であろうと言われている」との記述がある[52]。また別の記述では、1935年にはその数が１万人にものぼったとある[53]。

1930年初頭には、テュルク・タタールは、あらたに満洲国という新国家の建設に直面することになった。日本人は満洲国の建設を通じて、満洲の自治的な移民コミュニティに初めて接触することになった。日本人はこの経験によって、当地での民族政策を整理する必要があることを認識するにいたった。

テュルク・タタールの移住は、一面で反ソビエトの性格をもっていた。そのため、彼らの民族コミュニティを統御することは、日本の対ソ政策の目的に合致することになった。エセンベルによれば、1930年初頭に「共産主義に対するアジアの砦」としてムスリム・コミュニティを用いる日本のイスラム政策が始まった[54]。他のロシア人ディアスポラと比較すると、テュルク・タタール移民たちは商才に長けていたため、関東軍はこれを利用することに熱心になったのであろう[55]。彼らの長けた商才によって数年のうちに形成された広い世界的な商業ネットワーク（フィンランド、オスマン帝国、フランス、ベルギー、アルゼンチン、満洲、中国、朝鮮を結ぶ)[56]が情報収集ネットワークとして利益をもたらすと関東軍側は考えていたのだと考える[57]。

トルコ人研究者エセンベルによれば、明治時代末頃（1900－1911)、アジア主義を標榜する日本人がムスリムの代表と一緒に日本で「イスラム・サークル」を設立したという[58]。この「イスラム・サークル」は、ラシト・イブラヒムの友人だった大原武慶、山岡光太郎など「亜細亜義会」のメンバーだったと考えられる。このサークルの活動は、第二次世界

大戦前までの日本政府の回教政策に、少なからぬ影響を与えた。また、冒頭であげた1930年代に現れたイスラム研究と中央アジアの研究ブームの原因としては[59]、在日テュルク・タタール移民の活動が影響したと思われる。

関東軍は、テュルク・タタール移民を利用するために、分散していたコミュニティを、まずイスラム教の下に統一しようとした[60]。しかしながら、クルバンガリの影響力[61]によって、この宗教的な統一は実現できなかった。その時、日本はイスラム教徒が住んでいる領土を支配するためにアジア主義とイスラム主義を合併する必要があった。そのために、1933年にトルコからラシト・イブラヒムを招待した[62]。そこで、関東軍は、ほかの民族コミュニティに対してと同様、テュルク・タタールの移民コミュニティを民族的に統一することが最も効果的だと判断した[63]。

当時、政治に積極的なテュルク・タタール移民のグループは、ソ連において「イデル・ウラル」という自治州の独立を宣言した「ザブラク共和国」が失敗したため[64]、タタール人移住者の中央機関をポーランド大統領ピルスドスキ（1907年からイスハキの友人であった[65]）の援助を受けて、ワルシャワに設立した[66]。のち、この機関はドイツが台頭したとき、自分たちの独立運動を支援してもらうためにベルリンに移転した[67]。そして、1933年11月「イデル・ウラル国独立のための委員会」（Комитет независимости Идель-Урала）は、極東における民族の文化発展へと方向を変更するために、ベルリンに住んでいた独立運動のリーダーのアヤズ・イスハキを日本へ送った[68]。彼のこの目的は、結局のところ関東軍の目的と一致した。つまり、当時のタタール人移住者たちと関東軍は、互いに利用されて、また互いの力を利用する目的を持っていた。

以上のように、第二期のテュルク・タタールの移民の特徴は、ロシアから政治的な圧力[69]をうけて移住を余儀なくされた人たちだった。この時期、アジア各地に移住したテュルク・タタール移民の総人口は約１万人にのぼったという[70]。ハルビンのイマーム死後、東京がテュルク・タタール移民の拠点になったので、彼らは日本に対して政治的にも文化的にも親近感を抱くようになったのである[71]。

これらテュルク・タタール移民の職業は、大半が商売人や軍人であったが[72]、男女比率からいうと女性が多く、また子供たちをつれた家族が多かった[73]。コミュニティ内部では、民族学校を設立し、出版物を刊行した。こうした出版物の刊行にはたした女性の役割はとくに重要であった。というのも、子供たちの人数も増え、彼らの教育水準を高める必要を痛感していた女性たちは、学校と出版社での活動を開始したからである。こうした印刷物を通じてテュルク・タタール移民の民族意識は、おのずから反ソビエトと反共産主義的なものへと傾斜するようになった。とはいえ、この時期、民族独立運動をするための移住者の組織は完成しておらず、民族的なリーダーもいなかったので[74]、テュルク・タタールのコミュニティは微力だったと言わざるを得ない。

第３期：民族主義の台頭

(1)「イデル・ウラル・テュルク・タタール文化協会」の成立

イスハキが来日した1933年11月頃から、第二次世界大戦の始め（1939年９月）頃まで、すなわちアジアにおいてテュルク・タタール移民が民族主義的な運動を行う時期を第三期としたい。この時期、とくに1934年から1939年にかけて、アジア各地では、以前に作られたムスリム・コミュニティが組織の名称を変更して、ヨーロッパと同じように、東京と神戸を皮切りに「イデル・ウラル国独立のための委員会」という組織を創り[75]、その他各地にも同様な組織ができていった[76]。しかし、関東軍は、アジアにおける「道徳的な理由」で、「独立」という言葉を使わずに、「文化研究会」と改名するよう要求したので、その組織は正式には「イデル・ウラル文化研究会」と名づけられた[77]。この「イデル・ウラル文化研究会」は、イスハキ支持者の組織であったと考えられる。実際、1934年東京市渋谷区にできた「イデル・ウラル・テュルク・タタール文化協会」(15名）は、「東京回教協会」と対立した状態にあった[78]。また、神戸にいたテュルク・タタール移民は、1934年５月、最初の会議を開催した[79]。この会議では、日本にいるテュルク・タタールが統一して宗教的民族的な本部を作り、東アジア各地にいるテュルク・タタールたちとの統一会議を準備することが決議された。その他、この会議は、自分たちの民族の墓地、学校、図書館などを整備し、テュルク・タタールと日本人との相互理解という対策をとり、民族の財団を設立し、青少年の民族教育を重視することを決めた[80]。

(2) 奉天で『ミッリ・バイラク』刊行

こうして、1935年２月、満洲の奉天で、第一回「極東イデルーウラル・テュルク・タタール会議（タタール語で Idel-Ural Türk-Tatarlarnin Eraq Sharkdagu birinci kurultay)」が開催された[81]。この会議では、アジアにおけるテュルク・タタール移民の週刊新聞『ミッリ・バイラク』の発行を決議し[82]、これは1935年から1945年まで発行されることになった。アヤズ・イスハキは、この『ミッリ・バイラク』という新聞に、1935年から５年間、14件の記事を執筆したことが確認できる[83]。イスハキは、この新聞を、民族の統一と運動活動のための「主たる文化的な道具」と呼んで、おもに民族運動に反対するクルバンガリとイブラヒムについての批判記事を掲載した[84]。例えば、第18号（1936年３月13日）の記事「翻訳（Erak Sharktan kitep barganda)」では、アジアにおける民族運動の重要な目標として、統一と民族文化の維持をあげ、奉天の委員会を支援する必要性を述べている[85]。また、ロシア人を赤（共産主義者)、白（白い軍隊者)、黒（君主国主義者）の三種類に分けて、これら皆に反対を唱えた[86]。第37号（1939年８月18日）の記事「民族的な原則の主張（Milli deg'wabuznun prinsiplaru)」では、タタール民族の三つの基本的な原則、すなわち反国際主義や反マルクス主義、イスラム教や反無神論、反ロシア主義を主張した[87]。イスハキは『ミッリ・バイラク』刊行一周年記念のための「『ミッリ・バイラク』の一年」という記事

で、この新聞の役割と目的に関して次のように述べた。「ミッリ・バイラクは、将来にも民族を守るように歴史的な役割を示す」。彼は、刊行二周年記念のための記事でも、次のように述べている。「この新聞は極東におけるテュルク・タタール移民の喜びと悲しみ、期待と心配が反映している鏡になった。『ミッリ・バイラク』は、成長して、極東における人々と組織のための民族的な宝と指導者ともなった。これは彼らのために大事なものになった。新聞は移住先で生きて延びている人々の人生の歴史となった。『ミッリ・バイラク』は他のトルコ系民族の移民には、刊行物の間で尊重させる位置を占める」[88]。こうした主張が、イスハキや『ミッリ・バイラク』の論調を代表するものだった[89]。

『ミッリ・バイラク』の記事を分析すると、テュルク・タタール移民のコミュニティの所在、数、指導者の名を確認できる。欠落もあるが、表１を参照いただきたい。

《表１　北東アジアのテュルク・タタールの移民コミュニティ＊》

場　所	コミュニティ発足時期 t	資　　産	人口数（1941）	人口数（1942）	人口数（1945.9）**
満　　洲	1904	－	500	－	50
ハ イ ラ ル	－	学校２、モスク１	－	－	約500
ハ ル ビ ン	1904（ムスリム・コミュニティとして）	学校２（1907、1913）、慈善機関（1937）、保育所（1941）、モスク（旧 1907、新1937.10.15）	600	500	約500
Pogranichnaya	－	建物	－	－	0
奉　　天	－	建物、モスク（? year）、墓地	－	－	90
新　　疆	－	－	－	－	－
吉　　林	－	－	－	－	70
大　　連	－	－	－	－	－
神　　戸	－	モスク（1935.08.02）	－	－	200
東　　京	1927年（1923年？）	モスク（old 1938, new 2000）、学校	－	－	40
名 古 屋	1931.03.19	モスク（1937.01.22）	50	50	50
熊　　本	－	－	－	－	－
上　　海	1925年	－	120-200	－	200
天　　津	1928年５月８日	墓地（1933）、学校（1932）	－	－	－
京　　城	1923年以降	モスク（1926）、学校“ノグマニヤ（Nogmaniya）”、墓地	－	－	100-120
釜　　山	1923年以降	－	－	－	－

［注］本表はいまだ不完全であるが、参考までに。
＊これらのデータは、ほとんど『ミッリ・バイラク』（1935－1945）から。
** これらのデータは、Rukya Muhamedish' report（September 5, 1945.）から。

また、テュルク・タタール移民は、世界的な組織を作ることを目指して、西洋とアジアとの関係を接密にするために1935年から1939にかけてベルリンで『ミッリ・ユル』を出版し、奉天の『ミッリ・バイラク』との関係を強化し、毎刊に互いの記事を掲載しあった。

(3) 東京で『ヤナ・ヤポン・モフビリ』刊行

ほぼ同じ時期、東京にきていたテュルク・タタール移民のもう一人のリーダーであるクルバンガリは、『ヤナ・ヤポン・モフビリ（新日本情報)』という月刊雑誌を発行した。発行期間は、1933年から1938年である。クルバンガリは、コルチャーク将軍とセミョーノフ将軍のムスリム軍隊の指揮官を務めていたことがあり[90]、極東へ来たときの彼に対するテュルク・タタール人コミュニティの評価はさまざまであった。一方で、リーダーとしての能力を持つクルバンガリは、実質的に東京のムスリム・コミュニティを創設する役割をはたした。他方では、自分に対立する移民に関する密告を警察に提供していたので、彼に反発する者は多かった[91]。ただ、彼は、タタール民族の独立運動の推進よりも、ムスリムとしての運動の発展を望むカヂミスト（保守主義者）であることを重視しており、民族主義を標榜するイスハキと対立していた[92]。日本軍部は、この両名のタタール人リーダーの対立は、テュルク・タタール移民を合体するためには障害となると考え、1939年にクルバンガリを日本から満州国へ送還した[93]。

(4) 日本およびソ連におけるイスラムへの関心

1930年代後半より1945年にかけて、日本で活動したイスラム関係機関、及びそれらが発行した雑誌としては、回教圏研究所（『回教圏』)、大日本回教協会（『回教世界』)、外務省回教班（『回教事情』)、東亜経済調査局（『新亜細亜』)、東亜研究所、太平洋協会などが確認できる。このような研究所、研究グループが成立し、定期刊行物を出版し始めるという状態は、日中戦争勃発を契機として1937年直後に集中している。その当時の状況は、別の面では、1938年の東京での全世界回教徒第１次大会などからもうかがえる。

板垣雄三によると、回教圏研究所は外務省の回教班と非常に密接な関係を持ったが、政治とは無関係であり、当時のイスラム関係の諸研究機関のなかではアカデミックな機関であったという[94]。回教圏研究所が発足した1938年から1945年まで所長を務めたのが、トルコ学の先達であり指導者であった大久保幸次だった。彼は、テュルク・タタール移民からも友人として尊敬されていた[95]。

ソ連では、公安委員会がテュルク・タタールの動きに関心を寄せていた。1938年にカザンで「反ソビエト・反革命・パンイスラム的な」「イデル・ウラル」という組織に対して監視を強めた。なぜなら、ソ連政府は、タタールスタン自治国[96]のタタール人に、民族運動の影響が及ぶのを阻止したかったからである。現在のタタールスタン共和国の国家公安委員会保管所には、1938年に書かれた三冊からなる『反ソビエトであり民族的な中産階級のスパイ・反乱の「イデル・ウラル」という組織に対する事実集』という資料が所蔵されている[97]。この資料は、民族独立を目指した国内の活動家や移住者との関係で逮捕された

40人くらいの尋問記録である。これには、「イデル・ウラル」組織に対する裁判の目的の一つは民族運動を削除することである、と記されている。また、タタール人の民族独立運動は、ソ連に対して危険であると決め付けているのである[98]。つまり、ソ連の民族政策は、民族の発展を無視して、階級の相違を重視する理念に従っていたので、テュルク・タタールのイデオロギーは危険思想だと考えられたのである[99]。

この第３期のテュルク・タタール移民の活動をまとめると、民族的なアイデンティティに傾斜していたことを指摘できる。この頃から、アジアにおけるテュルク・タタール移民は、「テュルク・タタール・イデル・ウラル人」と正式に呼ばれ始めた。そのうえ、「イデル・ウラル国独立のための委員会」の設立は、タタール人が強い民族意識にめざめたことを明らかにしている。この時期、全世界のテュルク・タタールたちを統一させるための民族主義的なリーダーとしてアヤズ・イスハキが頭角を現した。アジアにおけるテュルク・タタール移民は奉天の中央委員会を中心にして、新聞『ミッリ・バイラク』を通して統一されていった[100]。各地のコミュニティは、制度化された民族組織になった。しかし、このコミュニティは民族独立という政治的な目標を持っていたために、全民族の政党と言うことはできない。

第４期：弱められた民族主義

第３期の末、1939年頃、ドイツに移っていたイスハキは、第二次世界大戦初期のドイツの社会状況やポーランド侵入などのドイツの対外政策に失望し[101]、イギリス経由でトルコに移った。その時から第二次世界大戦終わりにかけてテュルク・タタール移民の歴史の第４期になると考える。この時期、あらゆるテュルク・タタールはドイツや日本に利用されたといえる[102]。例えば、ドイツでは、1942年に「オスト・レギオン」という民族部隊に、「イデル・ウラル」というタタール人特殊部隊が作られた[103]。その部隊を創り指導するために、ドイツ指揮官の代表者は、当時トルコに移っていたイスハキを訪ねたが、イスハキはドイツと日本の政策に反発して、それを断った[104]。このとき、満洲国にも、ロシア人移民による特殊部隊が作られ、タタール人も参加していた[105]。

1941年８月28日から31日にかけて奉天で、「第二回東アジア・テュルク・タタール会議（ロシア語[106]）Idel-Ural」、「第二回極東イデルーウラル・テュルク・タタール・ムスリム人会議（タタール語で Idel-Ural Türk-Tatar musulmanlarnin ikinci Eraq Shark kurultay[107]）」（クルルタイ）が、「ハルビン日本軍（начальник Военной миссии в Харбине）柳田将軍による保護と奉天日本軍長（руководитель Военной миссии города Мукдена）の親切な協力によって」、開催された。その会議宣言では、テュルクやムスリムと、アジア民族との間の歴史的関係を強調している[108]。この会議は、「コミンテルンに対して敵意のある態度を述べて、大東亜の国民と一緒にその共同の大敵と戦うこと」[109] を決定した。テュルク・タタールはみずからの民族意識を弱めながらも、自分たちを利用するドイツや日本に対し、

しだいに失望していった。そうして、彼らはアジアから他の国々へ移動する方法を模索し始めるようになった。

こうして、第二次世界大戦でテュルク・タタールが戦争に動員されると、彼らのコミュニティは急速に弱体化していった。タタール民族のリーダーであったイスハキは、1936年にヨーロッパへ戻り、1939年にはイギリスに移り、1940年にはトルコへ移動したので、1939年以降民族運動を指導できなかったと思われる。実際『ミッリ・バイラク』へ記事などを送ることも止めたようである。ただ、『ミッリ・バイラク』自体は、東アジアにおけるテュルク・タタール移民に関する情報を1945年３月まで流し続け、コミュニティの存続を支えた。第二次大戦末からタタール人移住者は、おもに三つの国々、すなわちトルコ、アメリカ、オーストラリアへ向けて移動を開始し始めていた。

まとめと課題

本稿による以上の分析から、東アジアにおけるテュルク・タタール移民の内面的と外面的意義を明らかにできたと考える。

その内面的意義は次の通りである。東アジアにおけるテュルク・タタール移民は、国境を越えたトランスナショナル・ディアスポラとして、日露戦争以降、５つの時期に渡って構成された。その過程で、日本人、とくに日本軍、政治家・政治団体、宗教結社は非常に重要な役割を果たした。タタール人たちは、民族国家の建立のために、コミュニティにおける自治組織、メディア媒体、世界のタタール人ディアスポラとのネットワークを重視したのである。すでに述べたように、社会学的な見地からみると、テュルク・タタールのコミュニティは、ムスリム・コミュニティでありながらも、テュルク語を共通言語とするイデル・ウラル出身者たちとして特徴づけられる。

外面的意義は次の通りである。上述した、テュルク・タタール・コミュニティは、その変容の過程でホスト社会である日本にもイスラム教と文化を紹介するなどの影響を与えた。同時に、彼らも、日本のアジア主義思想に刺激されるとともに、日本の大陸政策の犠牲者となった。テュルク・タタール・コミュニティは、自分のトランスナショナル・ネトワークを通じて日本・トルコや日本・イスラム関係の発展に影響を及ぼした。文明論的な立場から結論づければ、こうしたタタール人ディアスポラの存在は、反植民地主義的な立場に立ち、日本と同盟してロシア、イギリス、ソ連に対立しようとする存在だったと考えられるだろう。

本稿で充分に検討できなかったタタール語メディア『ミッリ・バイラク』や『ミッリ・ユル』などの分析は、別稿を準備している。また、日本、朝鮮、中華民国におけるタタール人コミュニティの動向についての検討も、今後の検討課題となろう。

注

1）Хисамутдинов 2001; Хисамутдинов 2001/2; Ревякина 2002.

2）Stephan 1994: 2, 62; Гилязев 1994: 52–55; Гайнетдинов 1997; Wolff 1999; Юнусова 2001; Адутов 2001; Черникова 2003。

3）レヴャキナは、北東アジアにおけるロシア人移住を「ロシア地域的なディアスポラ」と名づける。Ревякина 2002: 70 を参照。

4）バシキル人研究者ユーヌソヴァが日本にいるタタール人移民の概念を確定する理由としてはこのコミュニティのリーダーであるクルバンガリの民族性がバシキル人だということにある（Юнусова 2001.）。筆者は、日本に住んでいるタタール人移民に対して、ユーヌソヴァの指摘は尊重するが、極東にいるすべてのタタール人移民にこの定義を使用すべきではないと思う。なぜならば、ガイネトヂノフは、極東におけるタタール人移民が「テュルク・タタール移民」という定義を使用する際に、タタール人とバシキル人を統一していたと強調し、ロシア国家公安委員会保管所に残っているその時代の資料で「テュルク・タタール移民」という概念も使用しているからである（Записка 1935.）。

5）Хисамутдинов 2001/2: 53。

6）イデル・ウラル共和国（イデル・ウラル・シタトあるいはボルガ・ウラル・シタト）はロシア連邦におけるタタールとバシキル民族国家の仮定形として1918年３月１日に宣言される予定だったが、同地方のボルシェヴィキ政権との対立によって実現されなかった *Энциклопедия Татарская* 1998: 599）。

7）Исхаки 1993: 46.

8）アクチュラ（Акчура Юсуф, 1876–1935）。テュルク・タタールの政治家。1908年以後トルコに移住し活動した。1923年にトルコ国会の議員、トルコ大統領の補佐官。イスタンブル大学教授、トルコ歴史協会の会長（1931）（*Энциклопедия Татарская* 1998: 23）。アクチュラは「三つの政体（“Üç tarz-i siyaset”）」という論文で、オスマン帝国を改革するために三つの政体（イスラム主義、テュルク主義、フランス民主主義）を分析している（Акчура 1994）。アクチュラ自分自身は、どちらの制度を選ぶべきかについては言及していないので、この論文はテュルク主義のマニフェストであると言われている（参照：“National identity and statehood were central issues in Y. Akchura’s political essay, which laid the foundations of pan-Turkism”（Rorlich 2000: 178–9）。

9）イスハキは、『イデル・ウラル』という小論で次のように述べている：1917年11月のミッリ・メジェレス（民族議会）の判断によれば、「イデル・ウラルに住んでいるすべてテュルク語族人はテュルク・タタールを呼び始まった」（Исхаки 1993: 46）。同論ではクリミア・タタール人も「テュルク・タタール」と呼ぶ（Исхаки 1993: 44）。

10）日本におけるトルコ学の先達であり指導者であった大久保幸次の説明によると、「ハルビンで普通『タタル人』もしくは『韃靼人』と称せられているものは、全くトルコ民族に外ならぬのである」。この指摘によると、「テュルク・タタール」という概念は、当時の日本人研究者にとって民族的なタタール人だけを意味するものではなかったことがわかる（大久保 1924: 45–50.）。

11）アフノフが『ミッリ・バイラク』を「タタール人移民の古典書」と名づけた一つの理由は、

トルコにおいて『ミッリ・バイラク』の記事が人々に影響を与えるのを危惧したアタテュルクがその配達を中止することを命じた書状（1936年４月15日）によるとしている（Ахунов 2004: 64)。

12）Milly Bairaq. № 51. 6. 11. 1936. Ishaky G. “Milly Bairaq”nin ber ellugu.

13）Ахунов 2004: 64.

14）バキチュによるロシア人移住史研究を参考にした（Bakich 2002: 1)。

15）Esenbel 2004; Dundar 2004. を参照のこと . 松長昭も、Esenbel や Dundar と同じ歴史の時代区分に基づいている（Matsunaga 2004)。

16）Хисамутдинов 2001: 43。バイチュラと後述するイスハキに関しては、1934年８月28日、イスハキがハルビンを訪問した際、イスハキの「ジャン・ボエヴィチュ」という劇曲に参加したという記事がある（*Yana Milli Yöl*, 1934、№ 11, P. 18)。また、同年10月18日、ハルビンで「イデル・ウラル文化研究会」の中に青少年サークルを設立する会議に参加したとき、この青少年サークルの会長には H. バイチュラが選ばれたが、彼はバイチュラと親戚関係にあったと考えられる。(*Yana Milli Yöl*, 1934、№ 12、P. 29. Harbin Idel-Ural turk-tatarlaru medeniyet cumhuyet yaninda yashler tugreku tözuldu).

17）同上。

18）Хисамутдинов 2001/2: 53。ビクバエフ（ビクバイ）は、1934年８月イスハキの奉天訪問中に、奉天の「イデル・ウラル文化研究会」が設立された際、この研究会の会長に選任された(*Yana Milli Yöl*, 1934、№ 10, P. 30. Gayz bek Manju-Di-Go seferu: Mukdende.).

19）イスハコフは、17世紀から19世紀にかけてカザン・タタール人がロシアにおけるムスリム思想を発展させた、と記している（Исхаков 2004: 7)。また、ハブトヂノフは、1900年代初めに来日したテュルク・タタール・ムスリムのラシト・イブラヒムの1907年のつぎのような言葉を引用している、「私たちにとっては（アイデンティティとは－筆者）宗教と「ミレット(民族)」が統一したものです」(Хабутдинов 2003: 50.)。

20）イスハコフも、「ロシア・ムスリムは『歴史的に宗教・文化・民族・領土的な社会の団体』」であり、その「主な目的はロシア社会におけるイスラムの役割と機構化だった」と述べている（Исхаков 2004: 5)。

21）Амирханов 2002: 46。

22）イスハコフは、その時代のロシア・ムスリムの意識を作る原因として次の五つを述べる。汎スラブ主義、汎ドイツ主義、日本の勃興、ロシア議会の出現、トルコ共和国の誕生（Исхаков 2004: 32)。

23）Амирханов 2002: 46。

24）イスハキはテュルク・タタール人が「ロシアに対する日本の勝利を喜んだ」と述べた。(*Milli Yöl*, № 4)。

25）イブラヒムは1909年４月18日東京で行った講演で次のようなことと述べた、「… 日本人のムスリムに対する友愛の感情は片方にだけではなく、双方に認められたのです。日露戦争が始まるやいなや、全世界のムスリムは心の底から日本の勝利を祈ったものです。」（イブラヒム 1991: 299)。

26）イブラヒムは大阪のタタール捕虜兵のことを横浜の日本人に教えてもらったと記している（イ

ブラヒム 1991: 344)。

27) 筆者はこのことを、1934年に東京で生まれ、現在カナダに住んでいるタタール人移民アヤズ・アギから教えられたが、これを確認する資料は今のところ見つかっていない。

28) 例えば、イブラヒム、ムサ・ビギエフ、アヤズ・イスハキ、ユスフ・アクチュラ。ユスフ・アクチュラにとって日本の勝利は有名な「三政治的な体制」の文章を作る理由になった。この文章の意義は、トルコ主義の誕生を示したところにある（Хабутдинов 2003: 78)。

29)「アブデュルレシト・イブラヒム」とも書かれるが、筆者はタタール語の発音に準じてラシト・イブラヒムと表記する。*Энциклопедия Татарская*. 1998. C. 214.

30) ラシト・イブラヒムは、反ロシアの宣言をしたことにより、1904年日本在住のロシア大使の要求で国外追放となり、イスタンブルで捕えられた（Ozbek 2003: 101 № 10.)。1902年以前の日本人との関係については不明である（Rorlich 2000: 236 № 15.)。1909年の再来日については、イブラヒム1991.

31) 彼は1906－07年ロシア・ムスリム会議の元となったイッチファク・アリ・ムスリミン党の中央委員会会員で、雑誌・新聞の発行者だった*Энциклопедия Татарская*. 1998. C. 214.

32) Ozbek 2003: 89、イブラヒム1991: 71–165.

33) イブラヒム1991: 134–144. イブラヒムは、基本的には、民族主義と宗教を紛争の手段としてではなく、反植民地主義の戦略として利用できると考えた。彼は、伊藤博文前首相に対して、宗教的な統一は広い地域に及ぶと説明した。1908年、オスマン帝国が崩壊したとき、イブラヒムは、アジア主義思想を振り返り、汎イスラム主義と汎トルコ主義の立場にたった。しかし、1930－40年代、日本にいたときは、日本国内の状況の変化によって汎アジア主義の考えに戻った。

34) 1909年に山岡光太郎はイブラヒムと共に大巡礼（メッカの巡礼）をおこない、ハッジとなった。

35) 山岡光太郎（1880.08.7－）は広島県福山市の出身で、1903年東京外国語大学ロシア語課程を卒業した。その後、日本の情報局員として任官し、ロシア軍隊について情報を収集するために満洲に送られ、大原隊長の下についた。大原武慶は、山岡と同様に福山市の出身で、親しい関係にあった。この二人は、ロシアに対して戦略的に（情報収集を含め)、テュルク・タタール移民を利用しようと考えた。

36) Sakamoto 2003: 108.　イブラヒム 1991: 340。日本で最初のモスクは神戸に建設され、1935年８月２日に開かれた。

37) イブラヒム 1991: 361–362. 亜細亜義会は、辛亥革命後「大亜義会」と改称し、満州の奉天に本部を移した。

38) Ozbek 2003: 88.

39) そのために、イブラヒムは、1933年トルコから日本政府に招待された。

40) イブラヒムは、さらに東南アジアのイスラムの歴史とタタール人の政治や歴史に関する本を著した（Энциклопедия 1998: 214)。また、1908年には伊藤首相と会ったという（Ozbek 2003: 89)。

41) 1908年イブラヒムが来日したとき、彼は軍人や民族主義者と会い、その一部をイスラム教に改宗させた。この点については、Sakamoto 2003: 105–121 を参照のこと。

42）小村不二男は、とくに黒竜会・玄洋社とクルバンガリとの関係によって、タタール人が日本に容認されたのだと述べている。また、小村は、日本でイスラムの活動を行うタタール人亡命者の歴史を1928（昭和三）年からだと指摘するが（小村 1988: 68; 293）、実際にはタタール人の来日はそれ以前である。

43）日本におけるタタール・ディアスポラについては Dundar 2004; Адутов 2001 を参照。

44）タタール移民エムルラ・アギの日記には、「一人の一生」とあり、男性の商売人が多かったと考える（Аги 2003）。

45）この時代、ロシア国籍の人が日本や中国に行くのは困難だった。

46）Аги 2003: 37。

47）ムスリム・コミュニティとしてのマハッリャはソ連時代に消えたが、1999年からモスクが作られるとともに回復した（Энциклопедия 1998: 347）。

48）Esenbel, 2004: 4.

49）朝鮮におけるタタール人については Tahir 1990: 178–179; Ким 2002; Lee 2001 を参照。

50）クルバンガリ（Курбангалиев Мухаммед-Габдулхай, ?–1972）は、コルチャーク将軍やセミョーノフの内戦期シベリアにおける白軍の指導者たちの下の軍隊でムッラとして勤めて、反ソビエト活動に参加した。彼は、ロシア内戦中に南満洲鉄道株式会社でロシア語通訳者として勤め、ハルビン関東軍特務機関長と会った。1923年に来日し、1928年に「東京回教団」（東京市渋谷区、40名）を発足させ、1939年までに東京のテュルク・タタール・コミュニティの指導者として活動（モスク建設、民族学校やイスラム出版社設立）していた。1945年にソ連軍に捕らえられ、ロシアのヴラヂミル市内の刑務所に送られ、1955年まで投獄された。解放された後、東京に残した家族と会おうとしたがソ連政府に禁じられた。亡くなるまでチェリャビンスク地方のムッラを務めた（Юнусова 1999: 110–111）。

51）クルバンガリは、1922年９月に日本政府へロシア語で手紙を書いた。この手紙では、トルコ人は日本人と協力する必要性を述べている（Kurban Galiev 1922）。エセンベルは、極東ムスリムを代表して手紙を書いたクルバンガリを「日本当局がイスラム政策を立てることに影響を与えた移民開拓者であった」と尊敬する（Esenbel 2002: 180–214）。日本がテュルク・タタール移民を受け入れた原因の一つは日本民族主義者が対イスラム政策を作ることだったと筆者は考える。日本民族主義者とクルバンガリの関係については Esenbel 2004を参照。

52）Записка 1935。

53）同上、Esenbel 2004: 24。

54）Esenbel 2002: 192。

55）大久保幸次は「欧露タタール人は、商業を愛好する …」（大久保1924: 52）と述べ、タタール人の商業能力を彼らの特徴とする。

56）松長 1998: 221–225.

57）Sakamoto 2003: 108–109.

58）Esenbel 2004: 4 は、クルバンガリの「アルタイ語族同士」という考え方を強調している。

59）板垣 1979: 11.

60）日本のイスラム政策と「ムスリム・ディアスポラ」については Esenbel 2002, Esenbel 2003, Esenbel 2004 を参照。

61）Esenbel 2002: 191.

62）Sakamoto 2003: 105–121。

63）満州国では、各民族は、ロシア移民登録機関に登録された（Ревякина 2002: 25）。

64）1918年２月１日にカザンで「イデル・ウラル」という自治州を宣言する民族的な会議に参加した者たちは逮捕された。その日は、民族の国家を作る一つきりの機会を失う記念日だったと言われている（Хабутдинов 2003: 147）。

65）Гайнетдинов 1997: 85; Хаким 2004. イスハキは、1907年から1910年にかけて、政治流刑囚としてポーランド民族主義者ピルスキとアルハンゲルスク地方で一緒に住んでいたという。

66）イスハキは『ミッリ・ユル』を最初にワルシャワで発行した（Ishaki 1979: 120）。

67）同上。イスハキはベルリンの印刷所と有利な条件で契約したので、移動した。

68）ロシアのスパイの記録による（Записка 1935）。

69）最初、ロシア革命に反対するタタール人の金持ちと宗教指導者がロシアを逃がれた。

70）Записка 1935。

71）トルコ人学者エセンベルが言及する「イスラム教との日本の経験は、20世紀における最初の実例として、トランスナショナル・ディアスポラが世界の大国の利益を脆弱的にすることを明らかにする」との指摘は、示唆的であり（Esenbel 2004: 43.）、とくにイスラム教を通じたテュルク・タタール移民と日本の関係に注目する必要がある。

72）1923年末にロシア白軍の約９千人はウラディオストックから中国、日本、フィリッピンへ逃げた。その軍人たちは移民として東アジアにおけるロシア移民のコミュニティに加入した（Ревякина 2002: 10–15）。

73）当時、ロシア革命後政治的な圧力を受けたロシア移民は家族一緒に逃げた。このため、社会学的な意味を持つ普通のコミュニティが形成された。

74）クルバンガリは、東京のコミュニティのリーダーとして、全東アジアのタタール人リーダシップを持てなかった。その時ハルビンのコミュニティはクルバンガリには反対しなかったが、時々自治的な政策を行った。

75）東京の委員会は1934年２月23日に設立された。神戸の委員会は1934年４月に初めての日本のモスクで設立された。（Matsunaga 2003: 206–207）。

76）名古屋の委員会は1934年３月30日に設立された。九州の委員会の活動は熊本で1934年８月13日から始まった（Matsunaga 2003: 206–207）。

77）Записка 1935。

78）内務省警保局 1980: 149–170.

79）1934年５月９－12日に開催された（Matsunaga 2003: 207）。

80）Архив Исхаки 61. タタールスタン共和国立公文書は、この集会に関するイスハキの「テュルク・タタール・ムスリム会議の計画」（手書き、３頁）の書類を保存している。

81）Matsunaga 2003: 209。

82）Тюрко-татарская община 1942: 316–318。

83）*Milli Bairaq*.（№ 16 21.02.1936, № 51 6.11.1936, № 101 12.11.1937）。ただ、タヒルは、『ミッリ・バイラク』に掲載された彼の記事を41件だとする。例えば、「新トルコについて」、「ソ連のロシア語化する政策」、「トルコにおけるロシア移民たち」、「極東における民族の刊行物」、

「反コミンテルン運動」などを挙げている（Ishaky 1979: 118–120)。

84）*Milli Bairaq*. № 2（1935.11.8.), № 14（1936.2.4), № 15（1936.2.14.), № 18（1936.3.13.), № 20（1936.3.27.), № 29（1936.5.29.), № 97（1937.10.15.), № 178（1939.8.18.)。

85）*Milli Bairaq*. № 18（1936.3.13.), Ishaky G., “Erak Sharktan kitep barganda”. この記事でイスハキは「現在の義務はメルケズ（中央委員会）の統一を守ることである」と述べた。

86）*Milli Bairaq*. № 63.（1937.2.21.), Ishaky G. “Korban bayrame”; *Milli Bairaq*. № 29（1936.5.29.), Ishaky G. “Dini hem milly burluq”.

87）*Milli Bairaq*. № 37（1939.8.18.）Ishaky G., “Milli deg'wabuznin prinsiplaru”.

88）*Milli Bairaq*. № 101（1937.11.12), Ishaky G., “Milli Bairaq”ne ike ell。この文章を書いた時、イスハキは、ワルシャワにいた。

89）『ミッリ・バイラク』を発行していた新聞社の人員は、10年間まったく替わらないままだった。主要なスタッフは、部長メルケズの総務長官イブラヒム・デブレトーキリヂ、主な記者はメルケズの教育委員会長ルキア・ムハメヂシュ、発行者はメルケズの会計委員会長セルマン・アイチだった。この三人が、この10年間、アジアにおけるテュルク・タタール移民の生活をしきっていた。ルキア・ムハメヂシュの伝記によると、三人は1945年８月までメルケズの活動を指導していた（Мохамедиш 2001; Muhamedish を参照)。

90）コルチャーク（Александр Васильевич Колчак, 1873–1920)。帝政ロシア提督。日露戦争に従軍。内戦期における白軍の指導者。1918年11月＜全ロシア政府＞陸海軍相、次いで同月のオムスクにおけるクーデタにより＜最高執政官＞に就任して軍事独裁体制をウラル以東のほぼ全域に樹立した。しかし軍事的敗北にともない、翌年末までにこの体制は崩壊した。イルクーツクで革命委員会の尋問をうけ、銃殺された（事典2004。280頁)。セミョーノフ（Григорий Михайлович Семенов, 1890–1946)。内戦期シベリアにおける白軍の指導者。ロシア革命直後、＜特別満洲里支隊＞と称する白軍組織を編制してザバイカル州の革命勢力と対決した。その活動に着目した日本の参謀本部は武器と資金を提供し、軍事顧問団を派遣するなど、密接な関係をもった。19年末までにコルチャーク政権が崩壊したのち、陸軍中将に昇進しコルチャークの委任によって＜極東全軍総司令官＞を名乗り、チタ地方に居すわったが、20年秋に極東共和国人民革命軍に敗北し、そのころまでに日本の支持も失い、セミョーノフの政権は崩壊した。以後、中国に亡命して反ソ活動を続けた。第２次大戦の末期にソ連軍によって逮捕され、モスクワで尋問をうけ絞首刑に処せられた（事典2004。414頁)。

91）松長 1998: 225.

92）Matsunaga 2003: 204。

93）詳しくは Matsunaga 2003: 197–215 を参照。

94）板垣1979: 15。

95）例えば、*Yana Milli Yöl*（1934、№ 9（80)頁６－７）は、大久保幸次の活動について記事と彼の写真を掲載した。

96）タタールスタン自治共和国は、ロシア連邦における1920年５月27日に建国。1990年８月30日独立国として宣言した。現代ロシア中央政府との条件に基づいて特殊状況を持ち（*Энциклопедия Татарская* 1998: 467)。

97）現在のタタール共和国 NKVD（前 KGB）所蔵 “Сборник следственных материалов по

делу вскрытой антисоветской буржуазно-националистической шпионско-повстанческой организации – «Идель-Урал»”（Archive KGB 1938: 35）。「イデル・ウラル」という組織に関する他のソ連の公安委員会の資料は、Документ № 35. 1999: 167–169 を参照。

98）Archive KGB 1938: 38。しかし、「イデル・ウラル」に関する裁判は、スターリンが担当係官たちを殺害したため、結局実現しなかった。「イデル・ウラル」という組織を裁判する起訴に関しては、Султанбеков 2002: 23; Гайнетдинов 1997: 130–133 を参照。

99）ソ連共産党のリーダーたちの考えによると、諸民族の発展よりは、諸民族文化などの力を統一することと、ソ連文化を国際化することとを重視していた。

100）『ミッリ・バイラク』には、東アジアにおけるテュルク・タタール移民組織の政府として機能していたメルケズの宣伝と政策の説明などが記されている。このことから、『ミッリ・バイラク』は東アジアにおけるタタール人の意識に影響を与えたと思われる。

101）ムハメヂシュによって書かれたイスハキの伝記（Muhamedish）によると、イスハキは、1939年にドイツがポーランドへ侵入したので、ドイツの民族対策に失望した。このイスハキの伝記は、フェリデ・デブレツキリヂの私的な記録文章に保存されている。

102）このことについて、エセンベルが「イスラム教を共産主義に対するアジアにおける砦とするという日本のアジア主義の概念は、東アジアに住んでいたクルバンガリ、ラシト・イブラヒム、他のムスリム・ディアスポラとゲームをしていた」、「解放者を探しているディアスポラは、1941年からアジアにおける日本の宣伝と情報局の道具となった」と述べている（Esenbel 2002: 210、Esenbel 2004: 43）。

103）ドイツとイデル・ウラル・テュルク・タタール移民の協力については Гилязев 1998参照。

104）ムハメヂシュによって書かれたイスハキの伝記（Muhamedish）によると、ドイツ軍の代表者は、1942年にトルコにいるイスハキを訪問した。

105）このことについて筆者は現在アメリカに住んでいるタタール移民セレフメト氏から示唆された。彼はハルビンで生まれ、1933年から1948年には上海に住んでいた。多くのタタール人は1940年くらいから満洲から上海へ移動したという。その一つの理由として、タタール人少年が満洲軍に参加させられることに反対したからだ、とセレフメト氏は語っている。

106）Тюрко-татарская община, 1942: 316–318。

107）Milly Bairaq. 29. 08. 1941. № 39（276）.

108）同上。

109）同上：318。

参考文献一覧

1．英語、トルコ語、タタール語文献

Bakich, O. 2002. *Harbin Russian Imprints. Bibliography as history, 1898–1961*, New York.

Dundar A. 2004. “Japonya Turk-Tatar Diasporasi”. *Modern Turkluk Arastimalaru Dergisi*. November.

Esenbel, S. 2002. “Japan and Islam Policy During the 1930s”. *In Turning Points in Japanese History*, edited by B. Edstrom.

Esenbel, S. 2003. “Japanese perspectives of Ottoman World”. In *The Rising Sun and the Turkish*

Crescent. Edited by S. Esenbel and I. Chinaru. Istanbul. pp. 7–41.

Esenbel, S. 2004. “Japan’s Global Claim to Asia and the World of Islam: Transnational Nationalism and World Power, 1900–1945”. In *The American Historical Review*, Vol. 109 N 4. http://www.historycooperative.org/journals/ahr/109.4/esenbel.html

Ishaki, 1979. *Muhammed Ayaz. Hayati ve Faaliyeti*. Ankara.

Lee, Hee-Soo. *Cultural Relations between Korea and Islamic World*. www.soc.nii.ac.jp/james/kouen2001.html

Matsunaga, Akira. 2003. “Ayaz Ishaky and Turco-Tatars in the Far East”. In *The Rising Sun and the Turkish Crescent*. Edited by S. Esenbel and I.Chinaru. Istanbul. pp. 197–215.

Matsunaga, A. 2004. *Ayaz Ishaki ve Uzaq serqdeki Tatar Turkleri*. Baku.

Milli Bairaq. 1935–1945.

Мохамедиш 2001. Мохамедиш Р. “Зур Борылыш”. *Шахри Казан*. 29. 06.

Muhamedish R. *Memoirs*. Private archive of Ferida Devlet-Kildy.

Ozbek, N. 2003. “From Asianism to Pan-Turkism: The Activities of Abdurresid Ibraghim in the Young Turk Era”. In *The Rising Sun and the Turkish Crescent*. Edited by S. Esenbel and I. Chinaru. Istanbul. pp. 86–104.

Rorlich, A. 2000. *The Volga Tatars. A Profile in National Resilience*. Moscow.

Rukya Muhamedish’ report (September 5, 1945.).

Sakamoto, T. 2003. “The First Japanese Hadji Yamaoka Kotaro and Abdurresid Idrahim”. In *The Rising Sun and the Turkish Crescent*. Edited by S. Esenbel and I. Chinaru. Istanbul. pp. 105–121.

Stephan, J. 1994. *The Russian Far East. A history.* Stanford University Press.

Tahir, 1990. Тагир, М. “Татарлар Кореяда”. *Казан утлары*. No. 7.

Wolff, D. 1999. *To the Harbin Station. The liberal Alternative in Russian Manchuria*, 1898–1914. Stanford University.

Yana Milli Yöl. 1929–1938.

２．ロシア語文献

Аги Э. 2003. *Жизнь одного человека*. Казань.

Адутов Р. 2001. *Татаро-башкирская эмиграция в Японии*. Набережные Челны.

Акчура Ю. 1994. Три вида политики//*Татарстан*. № 3-4. С.128-135.

Амирханов Р. 2002. *Татарская дореволюционная пресса (в контексте «Восток – Запад»)*. Казань.

Архив Исхаки. Гаяз Исхакый. “Записки об организации «Съезда тюрков-татар Дальнего Востока»”. *Национальный архив Республики Татарстан. Личный фонд. Гаяз Исхакый, татарский писатель (1887-1954 гг.)*. Фонд 2461. опись 1. дело 61.

Archive KGB 1938. *Сборник следственных материалов по делу вскрытой антисоветской буржуазно-националистической шпионско-повстанческой организации – «ИДЕЛЬ-УРАЛ»*. Казань. Фонд 109. опись 5, # 34, 35, 38.

Ахунов А. 2004. *Ататюрк против Исхаки. О запрете в Турции татарской газеты «Милли Байрак»*. Татарстан, № 5. с. 62-65.

Гайнетдинов Р. 1997. *Тюрко-татарская политическая эмиграция: начало XX века – 30-е годы*.

Набережные Челны.

Гилязев И. 1994. “Там, в иных краях (татарская эмиграция в 20–40-е годы)”. *Татарстан*. № 3–4. С. 52–55.

Гилязев И. 1998. *На другой стороне. Коллаборационисты из поволжско-приуральских татар в годы Второй мировой войны*. Казань.

Документ № 35. 1999. “Докладная записка об итогах оперативно-следственной работы отделов УГБ НКВД ТАССР за период январь-июль 1938 года. 3. По антисоветским националистическим «Идель-Уральским» формированиям”. // *А.Ф.Степанов. Расстрел по лимиту. Из истории политических репрессий в ТАССР в годы «ежовщины»*. Казань.

Исхаков С. 2004. *Российские мусульмане и революция*. Москва.

Исхаки Г. 1993. *Идель-Урал*. Набережные Челны.

Ким Г. 2002. *Об истории и современности ислама в Корее*. http://world.lib.ru/k/kim_o_i/f1rtf.shtml., 16/12/2002.

Ревякина Т. 2002. *Российская эмиграция в Китае: проблемы адаптации (20-40-е годы XX века)*. Москва.

Записка, 1935. *Современное состояние тюрко-татарского национального движения на Дальнем Востоке. Записка Квантунского жандармского управления № 465 от 23 марта 1935 года*. Фонд 109, опись 7, № 35.

Сахапов М. 2002. *Исхаки и татарская литература 20 века*. Казань, 2003.

Султанбеков Б. 2002. Шарафутдинов Д.Р. *Неизвестный Султан-Галиев: рассекреченные документы и материалы*. Казань: Татарское книжное издательство.

“Тюрко-татарская община”. 1942. // *Великая маньчжурская империя: К десятилетнему юбилею*. Изд. М.Н.Гордеев. Харбин. с. 316-318.

Хабутдинов А. 2003. *Лидеры нации*. Казань.

Хаким Р. 2004. Долгий и трудный путь к свободе (Гаяз Исхаки). http://tatarica.yuldash.com/biography/article26

Хисамутдинов А. 2001. *Российская эмиграция в Китае: опыт энциклопедии*. Владивосток, Издательство Дальневосточного университета.

Хисамутдинов А. 2001/2. *Россиийская эмиграция в Азиатско-Тихоокеанском регионе и Южной Америке. Библиографический словарь*. Владивосток, Изд-во Дальневосточного ун-та.

Черникова Л. 2003. “Тюрко-татарская колония в Китае. По страницам «Шанхайской зари»”. *Русское поле*, № 4. http://www.tatar-history.narod.ru/turk_migracion.htm 3.09.2004

Энциклопедия Татарская. 1998. Казань.

Юнусова А.1999. Ислам в Башкортостане.Уфа.

Юнусова А. 2001. *Татаро-Башкирская Эмиграция На Дальнем Востоке: Мусульманский фактор социальной адаптации и сохранения этнокультурной идентичности*. http://tatar-history.narod.ru/turk_migracion.htm 20.12.2003.

３．日本語文献

イブラヒム　1991．アブデュルレシト・イブラヒム『ジャポンヤ』(«Âlem-i Islâm ve Japonya'da Intisar-i Islâmiyet»)(小松香織・小松久男訳)(東京、1991年)。

板垣　1979．板垣雄三『1930年代におけるイスラム研究』[シンポジウム「わが国における中東地域研究に関する現状と展望」－情報と討論の記録](昭和54年)。

大久保　1924．大久保幸次『ハルビンに於けるトルコ民族の生活』(「東洋」27: 12号、1924年、45－57頁)。

鴨澤　1981．鴨澤巌「在日タタール人についての記録」『法政大学文学部紀要』法政大学、東京、No. 28−29、1983－1984年。

小村　1985．小村不二男『日本イスラーム史』(東京、昭和63年)。

Kurban Galiev 1922. Kurban Galiev letter, Sept. 1922, 03676-03694, Library of Congress Microfilms on Japanese Documents, M.T.1.1.2.1.2.。

事典　2004.『ロシアを知る事典』(東京、2004年)。

松長　1998．松長昭『アヤズ・イスハキと極東のタタール人コミュニティティ』(池井優、坂本勉編「近代日本とトルコ世界」、1998年、東京、220－263頁)。

『ソヴェート聯邦(ロシア)ノ民族』1940．(東亜研究所、昭和15年)。

内務省警保局　1980．内務省警保局編『極秘外事警察概況　第３巻　昭和12年』龍渓書舎、1980年、149－170頁。

キーワード　Turk-tatar migration, new archivical materials, changing identity, 5 periods, Japanese islamic policy, History, Migration, Turko-Tatars, Identity, Pressa

(USMANOVA Larisa)